

【研究論文】

「シラバスの可視化」及び「自己評価ルーブリック」利用による 学習意欲と修得内容向上のための取り組み

松本 亜実*

要 旨

本稿では、学生の苦手意識が強い情報科目に対し、学生自身が授業に意欲的に向かい、修得内容の達成感を確認できるようになるための取り組みについて述べる。主な取り組み内容は、シラバスの毎回提示による内容の可視化と、課題提出と同時に提出させた自己評価のためのルーブリックの実施の二点である。これにより授業 15 回の各内容の関連付けを学生に意識させ、ルーブリック自己評価により各課題に対する意欲の向上と習得内容達成の確認を図ることを意図とした。今期実施の結果をルーブリック利用による学生の声や、昨年度の同様課題との比較により考察した。

キーワード：シラバスの可視化、ルーブリック、情報教育、学習意欲

1. はじめに

筆者は 1997 年より大学、専門学校において情報処理系の授業を担当しており、本学においては半期 15 回でアプリケーションソフト（ワープロソフト、表計算ソフト）の操作を中心に指導する「情報基礎演習 I」の授業を担当している。

筆者自身が大学等で授業の担当を開始した 1997 年当時はコンピューターもインターネットも限られた環境でしか利用できず物珍しかった。学生たちは夢中になり知識の修得には意欲的で、前向きに取り組んでいた。

現在の学生は 2003 年から文部科学省の指導要綱に基づき、高校で「情報」が必修科目となり（澤田 2008）学校の科目として学習してから入学している。必修科目となる前までの学生と違い「遊び」「ゲーム」「インターネット」の道具であったパソコンが、「国語」「数学」「英語」など同様に教科「情報」として意識し、高校時代を過ごしてきた。「試験」「点数」「成績」に関連する科目であるものとして、遊び感覚の「パソコン」から意識の変化が見られるようになった。

教科としての「情報」を経験した学生たちは、出身高校により実施している内容には差があるが、「国語」「数学」「英語」のように「得意」「苦手」「嫌い

とはっきり口にするようになっている。

授業中も「知っている内容だからつまらない」「言われたことはできる」という学生と「苦手でやりたくない」「嫌い」「いやだ」のような学生との差が広がってきた。またここ 1～2 年は「スマホですんじやう」「パソコンは使わなくなった」のような会話も多くなっていた。

授業の「情報」としての苦手意識と、インターネット等を利用した情報収集の必要性から向かっていた「パーソナルコンピューターへの興味」に変化が見られるようになってきたのである。

2015 年度の 4 月、授業開始時に電子メール設定実施のために学生のモバイル端末の保有を調査した際は、スマートフォンやタブレットなどのモバイル端末の保有は 100%であった。前年度はまだ数人のいわゆる「ガラケー」と呼ばれる従来の携帯電話所有者が見られたが、全員がモバイル端末を利用するようになっていた。つまりコンピューターを利用して落ちついて考え、調査するという環境から今すぐに、少しのキーワードで情報に到達可能な環境へと変化が進んでいったのである。

また、それと同調するかのようには学生の変化として「しっかり読んで、考える」という意欲の減少が見られるようになった。

現在担当科目では、問題文をよく読み、コンピュー

* 岡崎女子短期大学

ターを利用し一人で作成するという課題を多く出しているが、内容をしっかり読まず「少ししか読まなかった」「読んでも忘れた」などの声が多くみられていた。また、「今できて出しちゃえばいいよね」「最低レベルとしてどうなっていればいいのか」「終わったらすぐ忘れるから」など自分の課題に対する学習向上意欲の低下もよく聞かれるようになった。そこで、モバイル機器の利用増加と学習意欲の関係性を調査するとともに、何かの行動を起こすことで意欲向上や学習修得内容の向上を測れないかと考えた。

II. 事前調査

総務省「平成 26 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」によると、平成 22 年に 9.7%であったスマートフォンの普及率は平成 25 年において 62.6%まで上昇している。

ではそのモバイル端末を学生は通話だけに利用しているのだろうかと考え調査した。

同調査「主なメディアの利用時間」(p.6)によるとモバイル機器によるインターネットの利用時間は平成 24 年において 10 代平日 120 分程度、休日 193.5 分となっていたが、平成 26 年においては 10 代平日 180.5 分、休日 216.0 分とさらに増加している。

では学生たちは何に利用しているのだろうか。同調査の「インターネットの利用項目別の平均利用時間」(p.17)によるとソーシャルメディア（以下 SNS と表記）の利用時間は 10 代平日 79 分、休日 125.5 分となっている。少し前まで主流であったメールは平日 14.3 分、休日 21.7 分となり SNS の利用は休日でおよそ 6 倍の時間となっている。

その中で「主なソーシャルメディアの利用率」(p.32)から現在主流の SNS の利用率を見てみると、LINE77.9%、Twitter49.3%、動画配信サイト YouTube を除けば、コミュニケーションサイト利用のパーセンテージが高くなっている。

Twitter は 140 文字という短文の文字制限の中で情報を共有するサービスである。2008 年から日本でのサービスが開始されているが、モバイル環境を利用して即時性の高い情報共有は「タイムライン」という手法で利用されている。またリツイートという手法を利用し「拡散」することでたくさん的人数で情報を共有することが可能である。

LINE は 2011 年にサービスが開始されている。電

話料金が不要の通話や、グループなどでメッセージ共有を可能としているサービスである。

会話は吹き出し上で画面に表示され、情報は時間経過とともに表示される。Twitter と同様時系列で情報が流通している。グループでの会話の際などは、リアルタイムで複数人数との会話の成立が実施可能で、まるで対面での会話のような短文で成立する。

つまり意思疎通や情報伝達のツールとして以前からある「手紙」「メール」というゆっくり読んで意味を理解し返信するという行動より、タイムラインという仕組みを利用し、次々に更新される情報を短文でやり取りする行動が多くなってきているのである。

電話ではもちろんお互いの言葉でのやり取りになるが、「文字」を利用する場合、ゆっくり考える、ゆっくり返事をするより、スピード感のある会話が日常的に展開されている。

会話は当然即時対応が多くなり、早い時間での決断や返信が求められる傾向にある。

この短い言葉で情報を読むという事が「問題文をよく読み作成する」という、試験問題の理解の低下を招いている可能性もあると考え、その中で課題の意図を理解し、より深い理解を確認する授業の取り組みを以前より模索していた。

現状として前述のように課題問題を長文で記述しても、読まずに取り組み学生や、名前やファイル名などの簡単な提出条件を明記しているにもかかわらず、満たないまま提出する学生の増加を減少させるためチェック項目を設定し、チェックするよう促したりしたが、あまり改善は見られなかった。

授業全体に関しても、「その場でできればおしまい」のような会話や「試験に出なければ覚えないうような反応が変わらず見られていた。

短文で情報交換をするので長文は苦手というような学生の増加に直面し、問題点を解決するために、今年度「情報基礎 I」の授業において学生の理解の促進を図るための方法を考えた。

昨年度日本における MOOC (Massive Open Online Course: インターネット上で誰もが無料で受講できる大規模公開講義)ともいえる「gacco」の取り組みが始まり、その中で公開された東京大学の栗田佳代子、中原淳が構成する「インタラクティブティーチング」の講座を筆者は修了し、終了証を修

得済みで、その際グラフィックシラバスによる学生の到達度の可視化とシラバスの記述方法による明確化、ルーブリックを利用した評価方法、確認方法を学んだ。また「大学教員のための授業方法とデザイン」(佐藤 2010)にはシラバスの効果的な表示方法や授業全体の設計方法があった。ルーブリックに関しては「大学教員のためのルーブリック評価入門」(ダネル アントニア 2014)より具体的なルーブリックの作成方法やその利用法の記述を参考にした。さらに「創造的思考法」(バリュー・ルーブリック 2010)による「自己評価としてのルーブリックの利用」から自己評価基準としてのルーブリックの利用を考えるようになった。

まず、毎回の授業を関連付けることで、知識の修得と応用を意識する可能性の向上と、短文でやり取りする事が多く、長文の課題内容を確認しにくい学生に対して、自己評価ルーブリックでの利用により問題文の再確認と実施の可能性の向上があるのではないかと仮定した。

効果として「自分で理解し、意識を持って自分で取り組む」ことを目指したのである。そこで以下の内容を 15 回の半期授業で実施することで学生の理解度の向上を目指した。

半期授業内では以下の 2 点の実施を試みた。

1. 毎回シラバスと目的、目標を提示し、全体におけるその授業実施回の位置と、授業終了時までのプロセス、およびその授業回の修得内容の提示。
2. 提出課題に対して自己評価ルーブリックを作成し、課題内容の理解の促進と確認の実施。

Ⅲ. 授業内容

今年度の情報基礎 I、半期 15 回に関して学生に配布された授業のシラバスは以下の通りである。

1. オリエンテーション
2. メール設定、Word の基礎入力
3. Word の書式
4. 図の利用
5. ビジネス文書作成 (課題提出)
6. 罫線の基本
7. 罫線利用の課題 (課題提出)
8. Web 情報の利用と著作権
9. Web 情報利用のレポート (課題提出)

10. Excel の基礎
11. Excel の計算と関数
12. Excel のグラフ (課題提出)
13. 総合課題 園便り作成 1 (個人課題)
14. 総合課題 園便り作成 2 (個人課題)
15. 相互評価と講評

※「園便り」とは幼稚園、保育園発行の保護者向けお知らせのこと

授業設定時点で 5 回の課題提出を実施予定であった。

ただし、授業進行過程において学生の理解度を勘案し 5 回目に変更を実施し、学生全員に変更シラバスを配布した。配布したシラバスは以下の内容である。

1. オリエンテーション
2. メール設定、Word の基礎入力
3. Word の書式
4. 図の利用
5. 罫線の基本
6. ビジネス文書
7. 罫線利用のビジネス文書 (課題提出)
8. Web 情報の利用と著作権 (課題提出)
9. Excel の基礎
10. Excel の計算と関数、グラフ
11. Excel 小テスト (課題提出)
12. 園だより原案とグループ相談
13. 総合課題 園便り作成 1 (個人課題)
14. 総合課題 園便り作成 2 (個人課題)
15. 相互評価と講評

変更理由はビジネス文書と罫線の課題を一つにし、各内容の理解関連付けの強化を試みるためである。また Web 情報の利用と著作権に関しては、自宅学習と自宅でのルーブリックチェックによる提出とした。

なお、13、14 回の課題は 2 回の授業つまり 2 コマ 3 時間、各自で作成する学期末の総合課題となっている。Excel 小テストと総合課題は課題取り組み授業内においては私語禁止とし、マシントラブル以外にはサポートすることは無し、として実施した。

これで半期授業において課題提出は計 4 回となった。各内容は以下のとおりである。

1. 罫線利用のビジネス文書
2. Web 情報の利用と著作権レポート
3. Excel 小テスト

4. 総合課題 園便り

IV. 実施内容

授業開始時に実施する授業内容の提示にはプレゼンテーションソフトの PowerPoint を利用した。

つまり授業開始時に全員にシラバスを提示し、半期授業内での課題の数とその習得内容の意識化を説明するためである。

授業開始時に提示したプレゼンテーション内容のうちシラバスの項目は図の通りである。

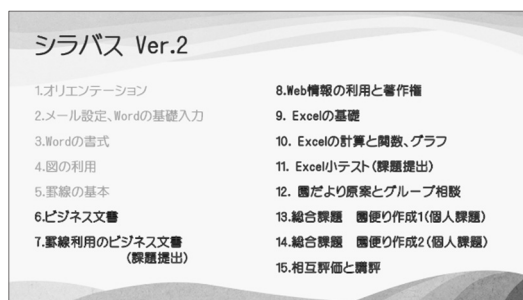


図 1 シラバス

文字色が薄くなっている部分は終了した内容で、この図は 6 回目の授業時に提示した資料である。

これにより現在の授業内容とその先に内容の関連を毎回意識させることを実施した。

資料にはそのほかに「科目の目的」「科目の目標」「今回のシラバスでの位置」「今回の目的」「今回の目標」「到達内容」の提示を実施した。

また授業終了時には毎回アンケートを実施し到達目標の確認も実施した。アンケートは学内で運用されている manaba というクラウド型教育支援システムの仕組みを利用した。このアンケートは 6 回目ビジネス文書の際の実施内容である。

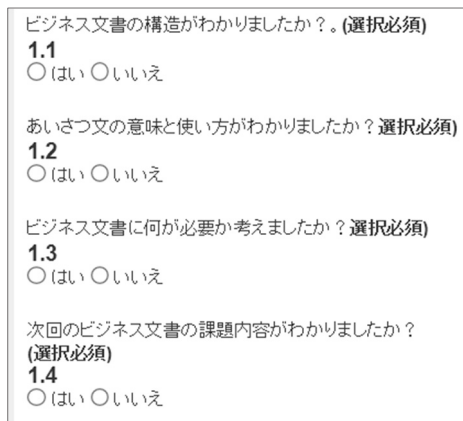


図 2 アンケートサンプル

アンケート結果で「いいえ」を選択する学生数が多い場合、次回の開始時、学生にアンケート結果を話しながら復習を実施した。振り返りを実施することにより、授業内容の関連や確認を意識化したいと考えたからである。

1 回目の自己評価ルーブリックの実施は 7 回目の罫線利用のビジネス文書（遠足のお知らせ）の課題提出時である。以下に実施した初回ルーブリックの内容を提示する。

2015 年度 遠足のお知らせ評価基準 前本垂実

ルーブリック(評価基準)遠足のお知らせ7回

姓 名

観点	理想的	標準的	要改善
課題の意図	出題の理由をよく読み、理解した。	ある程度理解した	あまりわからない、考えなかった
ストーリー(構成)	全体の構成を意図しよく考えてから作成した	少し考えてから作成した	成り行きで作った
内容	保護者の立場に立ちよく考えて作成した	少し考えて作成し挨拶文は利用した	挨拶文は利用していない、または適当
図	内容に応じて最適な図を検索し、加工し利用した	ある程度探して少し加工した	適当に利用したもしくは加工はしていない、図は使っていない
図形ワードアート	どちらかまたは両方を効果的に利用し、工夫した	利用したが工夫が不足している	利用していない、もしくは工夫していない
表	表の最適な利用方法を考え工夫した	少し考えてから表を利用し工夫もした	表がない、もしくは工夫していない
読みやすさ 誤字 脱字	読みやすさを意識し、誤字脱字がない	何度かチェックはしたが、あるかもしれない	チェックしていない
ヘッダー	指定された位置に設定できている	設定はできているつもりである	設定していない
完成度	出来ることは全てやりきった	ある程度で終わりにしてしまった	能力はもっとあるが、あまり頑張らなかった
感想			

図 3 ルーブリック内容

実施に当たりあくまでも自己評価ルーブリックであることを説明し、「評価とは関係ない」「初めに読み、最後に読み確認、修正後評価し提出すること」と話し課題提出時に自分で評価を付け提出とした。その後前述の 4 項目に対しそれぞれルーブリックを配布し、実際には 4 回のルーブリックを実施した。

V. ルーブリックに対する学生の変化

1 回目のルーブリックの配布の際には、最後に提出がなくあわてて丸を付けていた学生の姿が多くみられたが、2 回目から徐々に変化が見られた。戸惑っていた学生たちはその仕組みに慣れ、総合課題の前

には「ルーブリックは事前配布されないのか」などの質問が来るようになった。

Excel の小テストの際や、総合課題作成中にはルーブリックを取りかかか前に確認し、作業中にも自分の課題の内容と照らし合わせチェックする学生の姿を確認できた。感想欄には「何度も確認した」「どのように事前学習に取り組んだか」などの記述が多くみられるようになっていった。

ルーブリックはあくまでも自己評価であるが、学生自身の変化を数値化できないかと考え、「理想的」+2「標準的」+1「要改善」-1 とそれぞれ得点を付けることとした。そしてすべての学生のルーブリックを得点化することを実施した。

その結果 1 回目のルーブリック実施の際には低かった自己評価が、特に学生が苦手としている Excel 課題の際にはかなり上昇していた。総合課題はそれまでの課題より難易度が向上しているが、それでも 1 回目のルーブリックと比較して 1 ポイント近くの上昇が見られた。

表 1 ルーブリック平均点

日付	5/25	6/1	6/22	7/13
課題	遠足	レポート	Excel	総合課題
クラス1	12.70	11.91	13.89	14.04
クラス2	13.84	14.04	15.30	14.27
クラス3	14.87	14.91	15.72	15.13
平均	13.80	13.62	14.97	14.48

授業終了時に実施した manaba でのアンケートでは「ルーブリックがあつてよかったか」の問いに 99%の学生から「YES」の回答も得られた。

またメールで提出した感想では「初めはわかりにくかったルーブリックは、最後ははじめに読んで作業を確認したり、提出前にケアレスミスをチェックできたりして便利だった」「ルーブリックを確認することで自分のミスに気が付けた」「やるのが分かりやすくなった」との回答が複数の学生から得られた。

実際の課題ではルーブリック内の「ヘッダーの学籍番号」に関してみると、昨年度、実施不足の学生が多くみられたが、今年度は全員が実施していた。

また総合課題の内容としては、不足部分も少なく、難解な「罫線」「図形の挿入」「効果の利用」「読みやすさ」などに留意した課題が多く提出された。

TA として一緒に授業指導に当たっているスタッ

フも「昨年度より、取り組む意欲が向上し、ルーブリックと照らし合わせ作業確認していた」との意見が寄せられ、提出された課題の実施内容は向上したのではないかと確認しあえた。

つまりルーブリックを利用することにより、長文で記述するより、課題に向き合い前向きに取り組む意欲が向上したと判断できた。

学生の課題に向かう意欲の向上は見て取れたが、実際にそれは学習内容の向上につながっているか、学生に直面している筆者や TA 以外の意見を聞くことで確認できないかと、最終課題を利用して調査することとした。最終課題である「園便り」作成で学生に提示している「見やすさを目的として作成する」「授業修得内容を利用して作成する」という事が本当に実施されているかを調査するためである。これは第三者の投票により前年度との変化を可視化できないかと考えた。

VI. 総合課題の評価に関する検証

第三者に今回実施した二点について判断してもらうために、提出課題の評価を実施した。恣意的にならないようにまず 2014 年度、2015 年度に担当した 4 クラスの各クラスから学籍番号が 10 番、30 番の学生が作成した「園便り」2 枚を選択し、計 8 名分を選択した。

さらにアンケート用紙を作成し、対面で課題の趣旨を伝え「読みやすいと判断できる順」にて提出課題の印刷物を並び替えてもらった。

最終的に今回分析に利用したアンケートメンバーは幼稚園・保育園実習に参加済みの他校保育系大学生 8 名、各種大学等で情報処理の教育を実施している教員 5 名であった。実際の調査の際に「アンケートのお願い」とした文書中で課題作成内容のポイントと授業修得内容を提示した。

今回作成内容のポイントとして以下の 3 項目を提示した。

1. 保護者が見て解り易いと思うことを意識する事
2. 内容を自分でよく考え工夫する事
3. 半期授業で習得した内容を効果的に利用する事

また、「半期授業で修得した内容を効果的に利用し

て作成するための内容」に関しては以下の6項目を提示した。

1. 入力
2. 書式（フォント、フォントサイズ、色等の変更）
3. ワードアート
4. 画像の挿入と効果（写真、イラストなど）
5. 図形の利用（図形、テキストボックス）

6. 表

そのうえで、毎回提示順を変更し 16 枚の課題を並べて順位付けの実施を依頼した。

参考までに 2014 年度の課題作成のために学生に配布した資料と 2015 年度のループリックを示す。


2014 情報・前期課題(担当教員 松本亜実)

課題内容 オリジナルお便り作成

提出 14 週終了時 (なお、印刷は 15 週のため、やむを得ない場合 14 週後変更も可)

印刷 15 週 授業開始時にカラーで印刷(全員出席)

用紙は縦・横・どちらでも可 また、余白設定は自由です。

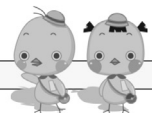


以下の注意事項を守ってください

	用紙のヘッダ右上に学籍番号のみを半角で必ず表示 例 1452X01
	ファイル名は学籍番号名前お便りとする 例 1451X01 園便り

★利用必須事項★ (必ず実行)

チェック	内容
	わかりやすい自分らしいお便りづくり
	フォント(文字)フォントサイズの変更
	図の利用(インターネットなどから)
	図の効果(ぼかし、光彩、図形に合わせてトリミング)
	文字列の折り返し利用
	図形の利用と図形に文字を入れる。色を変える。効果をつける。
	ワードアートもしくは文字の効果



◎余裕があれば利用◎ (できる人はやってみてください)

チェック	内容
	表
	ページ罫線
	Excel で作成したグラフの貼り付け等

楽しいお便り作ってね

これ以外でもやれることがあれば何でもやってみてください。
保護者の方が読みたくなるようなお便り作成にチャレンジしてください。
頑張ってください。
なお、13 週・14 週とも授業終了時に念のため、メールで提出して下さい。
どちらも提出の際、自分のお便りのポイントを書いていただきます

※保存は、USB メモリ、サーバともに必ず落着いて保存してください。※
※自宅での作成はバージョン、プリンタなどの設定により表示が変わる可能性があります。※
※できたら学校の環境で作成しましょう。※

頑張ってください

図 4 2014 年度総合課題園便り作成のためのチェック用紙

2015 年度 園便り評価基準 松本亜実

ルーブリック(評価基準)園だより 12回

学番 _____ 名前 _____

観点	理想的	標準的	要改善
課題の意図	出題の理由をよく読み、理解した。	ある程度理解した	あまりわからない、考えなかった
ストーリー (構成)	全体の構成を意識しよく考えてから作成した	少し考えてから作成した	成り行きで作った
内容	保護者の立場に立ちよく考えて楽しいものを作成した	少し考えてから楽しくなるように作成した	あまり考えずなんとなく作った
図 ワードアート	内容に応じて最適な図を検索し、加工し利用した	ある程度探して少し加工した	適当に利用したもしくは加工はしていない、使っていない
図形 表	どちらかまたは両方を効果的に利用し、工夫した	利用したが最適ではない、工夫が不足している	利用していない、もしくは工夫していない
読みやすさ 誤字 脱字	読みやすさを意識し、誤字脱字がない	何度かチェックはしたが、あるかもしれない	チェックしていない
ヘッダー 学番のみ	指定された位置に設定できている	設定はできているつもりである	設定していない
完成度	出来ることは全てやりきった	ある程度で終わりにしてしまった	能力はもっとあるが、あまり頑張らなかった
感想			

図 5 2015 年度総合課題園便りのルーブリック

ただし、2014 年度は自己チェック後の回収は実施していない。2015 年度はルーブリックでの自己評価後感想を記述し、全員提出を実施した。

VII. 調査結果

調査結果の評価方法は本人が並び替えた順に課題に得点を付け、その課題の優位順に 1 位 16 点から減点していき 16 位 1 点まで得点を付けるという方

法を実施した。

アンケート後の集計が表 2 である。グレー部分が 2015 年度（今年度）実施の学生の課題である。各年度学籍番号での抽出のため、偶然 2014 年度は学年 1 位となった学生の課題も含まれていた。表中のアルファベットは実施者をアルファベットで A から表示したものである。また、表中の番号は課題ごとに便宜的につけた番号である。番号で年度判別がつかないように、年度を混在させて通し番号を振った。

表2 アンケート集計結果表

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1位	16点	12	15	12	16	5	11	4	15	12	15	12	15	12
2位	15点	15	3	4	12	12	12	16	11	11	12	4	5	6
3位	14点	4	4	1	15	15	10	11	10	15	1	16	8	1
4位	13点	3	1	15	1	4	1	13	16	4	11	10	14	15
5位	12点	10	12	9	13	16	15	7	1	2	4	15	16	3
6位	11点	11	6	6	10	11	9	12	6	16	16	1	10	11
7位	10点	16	9	11	5	10	4	15	13	5	2	6	1	4
8位	9点	9	16	3	4	8	5	14	5	10	6	5	6	13
9位	8点	14	5	5	11	6	16	5	12	7	7	11	9	5
10位	7点	7	10	10	9	3	3	6	2	9	3	2	7	10
11位	6点	1	14	13	8	7	8	1	8	13	5	13	3	7
12位	5点	8	13	2	7	2	7	9	3	8	10	9	2	8
13位	4点	2	7	16	6	9	6	10	4	6	8	7	12	2
14位	3点	13	11	7	14	1	2	3	7	3	9	3	11	16
15位	2点	6	2	8	2	13	14	8	9	1	14	8	4	14
16位	1点	5	8	14	3	14	13	2	14	14	13	14	13	9

この内容を年度別に調査し、全体の得点数を計算した。まず、2015年度、2014年度の総合得点に差があるかを算出した。

これにより総合得点は2014年度より2015年度は8.30点総合得点数が高くなった。

表3 年度別得点合計

2015計	72.15
2014計	63.85

つまり、総合的に2015年度の課題の方がよりわかりやすく授業内容が反映していると判断した人数が多くなった。

また各課題に対する平均値を算出したところ2014年度より2015年度は1.04点平均値が高くなった。

表4 年度別得点平均

2014平均	9.02
2015平均	7.98

評価順に16点から1点までの得点を持たせた課題は平均すると各8.50点となる。その差が1.04点あるという事は、2015年度の課題は2014年度の課題より各課題が約1点の優位性があるという結果が表示された。

ここで実際に教員としてWord教育を実行している5名は出題の意図の理解や、実践内容の理解が高く、評価の基準が明確ではと仮定し、教員5名のみの年度別合計、平均を算出した。

教員の得点は2014年度より2015年度はさらに広がり13.60点得点数に差が出た。

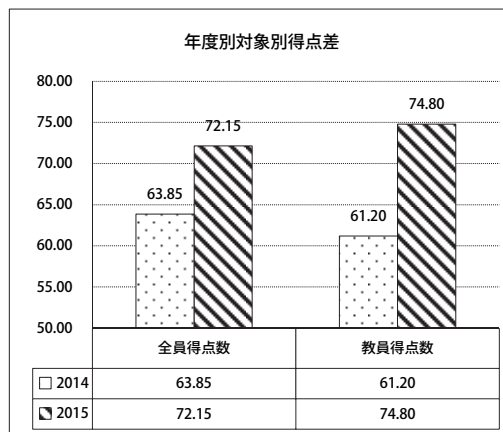
やはり、2015年度の課題作品は2014年度の作品よりより課題の意図に添って作成されているという結果が出た。

また平均値も算出したところ2014年度より2015

年度は1.70点平均値が高くなった。一つの課題に対してほぼ2点の差が計算により提示された。

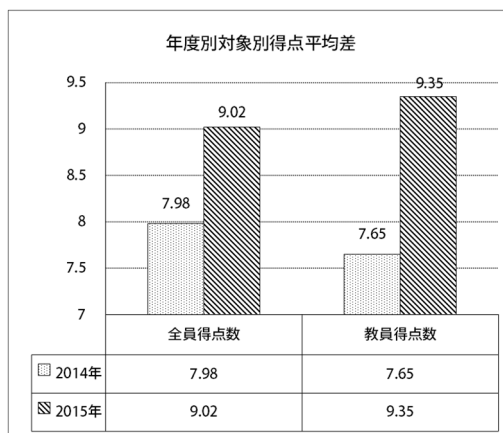
2014年度、2015年度の差、また全体と教員の差をわかりやすくするためにグラフ化した。

グラフ化によりその総得点の差および教員と全員の差が明確化した。



グラフ1 年度別対象別得点差

平均でも同様に差および教員と全員の差が明確となった。



グラフ2 年度別対象別得点平均差

つまり、課題の趣旨や定着を望んだ学習内容をより理解している「教員」という立場のメンバーによる評価ではより有用性があると確認ができた。

VIII. 考察

今回、シラバスによる学習内容の可視化と、ルーブリック利用による学生の自己評価を実施した結果、現在の分析結果では実施に効果があると確認できた。

実際には授業アンケートで授業内容の確認をすること、次の授業での振り返りなどの実施、などによりその授業回での修得内容がより明確になったことも今回の数値に表れているのではと考えている。

毎回の授業の目的と目標の提示で、現在はこの内容のどこまでクリアできているか、全体としてどの内容の修得を目指しているかを明確化することで「先生、今日は何やるんだっけ」という声は聞こえなくなっていった。「今回はこれをやるんだよね」という発言や「最後の内容に関連があるから、復習してきたよ」などの発言もよく聞こえるようになった。毎回のシラバスの提示は学生に前回、次回、次々回という授業の継続による授業全体のデザインの理解の向上に役立ったのではと考える。

また、ルーブリックの提示により、課題はできたらすぐ提出ではなく、自分で自分の課題の信頼性を向上するという「意欲」の向上につながったのではないかと考えている。ルーブリックの「感想」項目では、最後に課題に取り組んだ感想の記述も実施したが、細かく長文で自分がどのように取り組んだか、どこをポイントに作成したかの内容を書き込んだ学生が多く、その取り組みの成果に触れる事も出来た。

ただし、これはあくまでも少数のデータであり、実際にどのような効果が得られるかははまだ調査不足である。

学生の年度ごとの質や傾向などの属人的傾向、授業スケジュールの差など各種の環境要因も加味して来期も調査を継続する予定である。

今後はルーブリックの内容を含め、より理解度を深め、学生自身の課題に対する意欲や、学習全体に対する意欲の向上のために研究を続けていきたいと考えている。

モバイル端末の利用は、人間の行動自体にかなりの変化を与えていると考えている。LINE、Twitter

の利用は即時性を要求し、それによりコミュニケーションが増えたという利点もあると考えている。モバイル端末の利用は疑問点も「すぐに調べる」という作業が可能になり、知識の増加にも役立っていると考えている。

ただしそんな現状をうまく利用しながら、「しっかり考えるときは考える」という行動を伝えていきたいと考えている。

また、課題一つ一つに達成感を持ち、授業内容を関連付けることから、「一人で考えられる」「やった内容を思い出す」「よく文章を読んで取り組む」という気持ちの向上から「達成できた」という自信につなげていきたいと一層の努力と工夫、研究を続けていきたいと考えている。

謝辞

アンケートに当たり、20人以上の方々に実施をお願いしましたが記述内容の重複などから13名を選択し、その結果を今回利用しました。

実験に参加していただいた多くの先生方、学生さんに感謝いたします。また今回の内容のアドバイスを頂いた多くの先生方に心から感謝いたします。

参考文献

- ・澤田大祐 「高等学校における情報科の現状と課題」 『調査と情報』 第604号 2008
- ・総務省 情報通信政策研究所「情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」2015
http://www.soumu.go.jp/main_content/000357569.pdf (2015.11.15 確認)
「主なメディアの利用時間」(p.6)
「インターネットの利用項目別の平均利用時間」(p.17)
「主なソーシャルメディアの利用率」(p.32)
- ・Twitter <https://twitter.com/> (2015.11.15 確認)
- ・Line <http://linecorp.com/ja/> (2015.11.15 確認)
- ・gacco <http://gacco.org/> (2015.11.15 確認)
- ・佐藤浩章編 『大学教員のための授業方法とデザイン』 玉川大学出版部 2010
- ・ダネル・スティーブンス+アントニア・レビ 佐藤浩章 井上敏憲+俣野秀典訳 『大学教員のためのルーブリック評価入門』 玉川大学出版部 2014
- ・米国大学協会バリュー・ルーブリック「創造的思考法」2010
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/g

- iji/_icsFiles/afieldfile/2011/12/20/1314317_1.pdf
(2015.11.15 確認)
- manaba <http://manaba.jp/> (2015.11.15 確認)
 - 山田嘉徳、森朋子、毛利美穂他 『学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討』 関西大学教育開発支援センター 2010
www.kansai-u.ac.jp/ctl/activity/pdf/kiyo.../kiyo_no.6_03.pdf (2015.11.15 確認)
 - 安藤輝次 「一般的ルーブリックの必要性」 『[奈良教育大学] 教育実践総合センター研究紀要』 第17号 2008
www.nara-edu.ac.jp/CERT/bulletin2008/CERD2008-R01.pdf (2015.11.15 確認)
 - 山田哲也 「コンピテンシ基準を用いたルーブリック」 実教出版 2005
www.jikkyo.co.jp/contents/download/4276369909
(2015.11.15 確認)